茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究　第 1 号（2018），57-68

日本社会における英語圏交換留学生の
異文化理解に関する一考察

石鍋　浩*・安　龍洙**

Cross-Cultural Understanding of Exchange Students from North America Living in Japanese Society

Hiroshi ISHINABE* and Yong Su AN**

要旨

異文化理解は、文化背景の異なる人たちとの交流を円滑に運ぶためのスキル習得による「共生」を重視したアプローチに変わりつつある。本研究では、PAC 分析を用い交換留学生の多文化共生に対する理解の構造を質的に明らかにすることを目的とした。結果、短期滞在者である交換留学生も日本社会での共生を模索していることが示唆された。留学生と支援者の PAC 分析結果共有によって、留学生の日本社会における共生の質を高めていけると考えられる。

【キーワード】多文化共生、異文化理解、英語圏交換留学生、PAC 分析

1. はじめに

異文化理解の問題は、従来の知識面を重視したアプローチから文化背景の異なる人たちとの交流を円滑に運ぶためのスキル習得による「共生」を重視したアプローチに変わりつつあると言われている（川那部 2006）。文化背景の異なる人たちの交流基盤となる、外国人の対日観および日本人の外国観について PAC（Personal Attitude Construction）分析（内藤 1997）を用いて質的に検討が行われてきている（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011、安・池田 2012、安 2012）。これらの先行研究において、外国人の対日観は（1）国籍による対日観の相違点が存在する一方で国籍に関わらず共通した対日観が多く存在すること、(2) 日本滞在歴の長い外国人ほどポジティブな対日観を有していること、(3) 日本滞在歴の短い外国人は肯定イメージと否定イメージが複雑に絡み「葛藤」

*東京福祉大学国際交流センター（〒 114-0004 東京都北区堀船 2-1-11; International Center, Tokyo University of Social Welfare, 2-1-11 Horifune Kita-ku, Tokyo 114-0004 Japan）
**茨城大学全学教育機構（〒 310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito-shi 310-8512 Japan）

状態にあることの 3 点が示されている。また、日本人の外国観は、(1) 対象が置かれている環境と外国人との接触頻度がイメージ構造に大きく影響すること、(2) 外国人の対日観同様ポジティブな評価とネガティブな評価が複雑に構成されていること、(3) スキーマが発達するにつれ柔軟に対応できるようになることの 3 点が示されている。

異文化観は変容も伴う。外国人の対日観と日本人の外国観の変容について、同様に PAC 分析を用いて行った検討（内藤 2014、安 2015、安 2016）では、外国人の対日観は（1）日本人との接触頻度の多さがポジティブな対日観への変容に影響したこと、(2) 多様な経験により来日当初（または以前）の対日観が具体化、組織化され独自の異文化観を構築したこと、(3) 日本滞在経験により複眼的な視点を身につけ他者の受容と自己理解を伴う人間的成長がみられたことの 3 点が示されている。また、日本人の外国観は（1）海外在住経験により自国観に対する質的変化（肯定・否定）が起きたこと、(2) 外国人との接触により異文化に対する態度構造が具体化・深化したことの 2 点が示されている。

PAC 分析は多変量解析を取り入れ、客観的に少数事例を詳細に分析することができる（内藤 1997)。加えて、連想刺激の操作的手続きにより、対象の内面へアプローチすることも可能であり、自身の問題について気づきをもたらすことが可能である（内藤 1997)。自己理解促進機能、信頼関係形成機能、記録記述機能、評価査定機能など、カウンセリングへの応用も示されている（井上 1998)。

外国人の対日観、日本人の外国観についての態度構造の質的記述が進む一方、日本社会における共生を進める前提となる、文化背景の異なる人たちの社会や人との関わりの態度構造は不明な点が多い。特に、留学生を対象に、日本で暮らす外国人である自分（留学生）が日本社会をどのように見つめ、日本人とどのように付き合うかについて質的に検討した研究は少ない。また、集団としての自国人と日本人がどのように付き合うかについての留学生の態度構造に関する質的な検討も少ない。そこで本研究では、日本人と外国人が共に暮らす日本社会における、留学生の多文化共生に対する理解の構造を質的に明らかとすることを目的とした。

2. 方法

日本国内の大学で学ぶ英語圏出身交換留学生 3 名（対象 A、対象 B、対象 C）を対象に、PAC 分析を実施した。研究協力に当たり、研究の目的、研究協力の任意性、匿名化によるプライバシーの保護、協力同意撤回の自由について文書および口頭で説明し同意を得た。対象が特定されることを回避するため、出身地域、性別、年齢等が推測されうる箇所は削除あるいは伏せ字とした。

本研究では、「私が生活する日本の社会」「日本人と付き合うこと」「自国人と日本人が付き合うこと」の 3 つのキーワードをあらかじめ連想刺激として指定し、留学生が日本社会においてどのように日本在住の人々と共生しようしているか質的に探るアプローチを採用した。

調査は第 1 部の質問紙調査と第 2 部の口頭調査から構成した。第 1 部の質問紙調査では、以下の刺激を与えイメージ項目を質問紙に記入するよう教示した。イメージ項目記入の際、連想刺激中の「① 私が生活する日本の社会、② 私と日本人が付き合うこと、③ 私の国の人と日本の人が分かり合うこと」を含めてイメージ項目が 10 個以上になるよう教示した。

刺激文：あなたは「① 私が生活する日本の社会、② 私と日本人が付き合うこと、③ 私の国の

人と日本の人が分かり合うこと」についてどのようなイメージを持っていますか。思い浮かんだ言葉やイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけて記入してください。言葉でも短い文でも構いません。

対象が記入した連想イメージを重要と思われる順序に並べるよう教示した。次に、各順位のイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いか7段階尺度で評定するよう教示した。評定結果に対し対象ごと個別にクラスター分析（Ward 法 ; HALBAU for Windows Ver. 6.24 使用）を実施した。クラスター分析の結果に対する対象自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらともいえない場合は (0) を記入するよう教示した。

第2部の口頭調査において、(1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、(2) 解釈についての来日前後の変化、(3) 各イメージ項目に対してそのイメージを抱くようになったきっかけや媒体について尋ねた。口頭調査は、2017年8月に第2著者が実施した。得られた結果に対し形成されたクラスターを中心に、(1) 留学生が日本社会をどのように見つめているか、(2) 日本人とどのように付き合おうとしているか、(3) 集団としての自国人と日本人が付き合うことについてどのように考えているか、(4) その他の4点について考察した。

3. 結果

3.1. 対象 A

図1は、対象Aのクラスター分析から得られたデンドログラムである。縦軸は連想項目順位、横軸は連想項目間の距離を示している。各連想項目の内容、連想項目イメージ (+) (-) (0)、各クラスターの解釈がデンドログラム内に示されている。

対象Aは10個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、5、7の4項目であった。クラスター2は連想項目順位3、4、8の3項目であった。クラスター3は6、9、10の3項目であった。表1は、対象Aのクラスター番号と解釈、異文化観イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体の一覧である。

以下の斜体で示したスクリプトは図1を対象Aに提示しながらクラスター1についてインタ

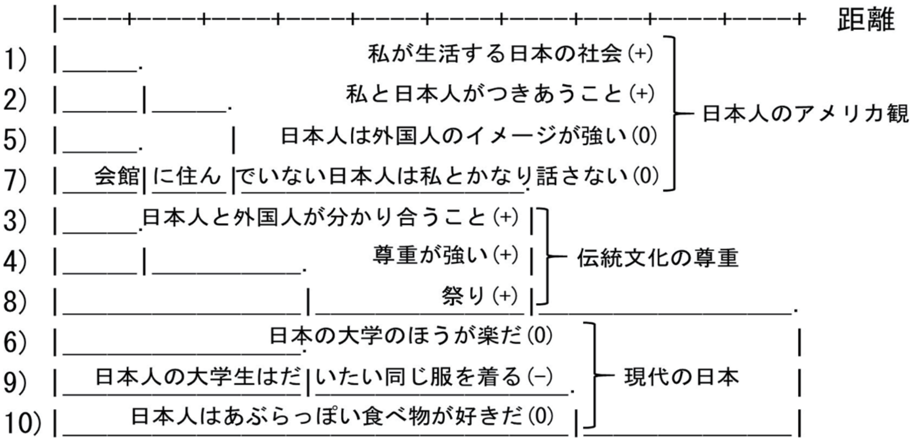

図1　対象Aのデンドログラム

ビューを行った結果である。インタビュー結果から、クラスター 1 を「日本人のアメリカ観」と解釈した。なお、留学生に対するインタビューを書き起こしたため、一部表現に不自然な点があるが極力オリジナルスクリプトに忠実に記載した。補足が必要と考えられる点には注を付した。丸括弧でくくった（来日前後の変化）以下は「(2) 解釈について来日前後の変化」に対する言及部分である。

日本人の精神とか社会についての内容で・・・。日本人と話すときに、いつもアメリカ人だから、こういうふうに考えるだろうと確認する。いつも聞かれる質問は、本当にアメリカでこのようなものが好きなのかとか、このようなことを好きなのかとか、一々確認するから、本当にそのイメージが強いと思います。時々アメリカ人のように答えたら、ちょっとステレオタイプになっちゃうから、いつも日本人のように答える。会館 1) に住んでいる日本人はよく外国人と話したり交流したりすることをしますから、多分あんまり恥ずかしく思わない。会館チューター以外の人はシャイで距離を取るが、アメリカ人を変な人だと思っちゃうかな。日本に来る前にちょっと分かったけど、こんなに強いか分からなかったと思う。

以下のスクリプトは同様にクラスター 2 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター 2 を「伝統文化の尊重」と解釈した。

祭りは伝統的な日本文化なので、・・・日本の歴史と関係あるから、それとも日本人と外国人の話すときに多分、尊重してくれることで分かり合うと思う…。日本の祭りや伝統を外国人が理解すれば、より深く日本人と分かり合える。（来日前後の変化）あんまり分からなかったけど思ったとおりです。

以下のスクリプトは同様にクラスター 3 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター 3 を「現代の日本」と解釈した。

表 1　対象 A の異文化イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体

クラスター番号 解釈	異文化観イメージ （順位、項目、評価）	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 日本人のアメリカ観	1．私が生活する日本の社会（+）	他の社会に住んでみて
	2．私と日本人がつきあうこと（+）	会館に住んでいるから
	5．日本人は外国人のイメージが強い（0）	日本人と話してみて分かったから
	7．会館に住んでいない日本人は私とかなり話さない（0）	日本人は恥ずかしいと思うから
2 伝統文化の尊重	3．日本人と外国人が分かり合うこと（+）	お互いの文化を理解するのは大切だから
	4．尊重が強い（+）	何度も相手を尊重するのを見たから
	8．祭り（+）	行ってみたから
3 現代の日本	6．日本の大学のほうが楽だ（0）	雰囲気が違うから
	9．日本人の大学生はだいたい同じ服を着る（-）	個性がないから残念だと思ったから
	10．日本人はあぶらっぽい食べ物が好きだ（0）	未記入

これは全部、現在的な日本文化かな。いいか悪いか言えないと思う。文化は全部違うから、いい点も悪い点もちろんあるけど。アメリカと違うだけ言えると思います。そう。食べ物。服のことも、アメリカ人より日本人は、ちょっと友達のクラスターの中で、みんな本当に同じような服。個性のある服を好んでアメリカ人は着るんだけど、日本人は違う。（来日前後の変化）そういう所に住まないと分からないことだと思うから。日常で経験したのことで、分かってきたと思います。

3.2. 対象 B

図 2 は、対象 B のクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象 B は 18 個の連想イメージを 4 つのクラスターに分類した。クラスター 1 は連想項目順位 1、7、10、12 の 4 項目であった。クラスター 2 は連想項目順位 5、14 の 2 項目であった。クラスター 3 は連想項目順位 6、13、4、2、11、9、8、18 の 7 項目であった。クラスター 4 は連想項目順位 3、15、17、16 の 4 項目であった。表 2 は、対象 B のクラスター番号と解釈、異文化観イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体の一覧である。

以下のスクリプトは図 2 を対象 B に提示しながらクラスター 1 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果から、クラスター 1 を「日本の日常」と解釈した。

自分の●●会館の生活している経験かな。友達とか、助けてくれる人がたくさんいますので。困ったときはあまりないですから。それは生活しやすいんだと思います。あとは大学と結構、近いですので。スーパーも近くて●●というドラッグストアもあるし、コンビニも近いし。

以下のスクリプトは同様にクラスター 2 についてインタビューを行った結果である。インタ

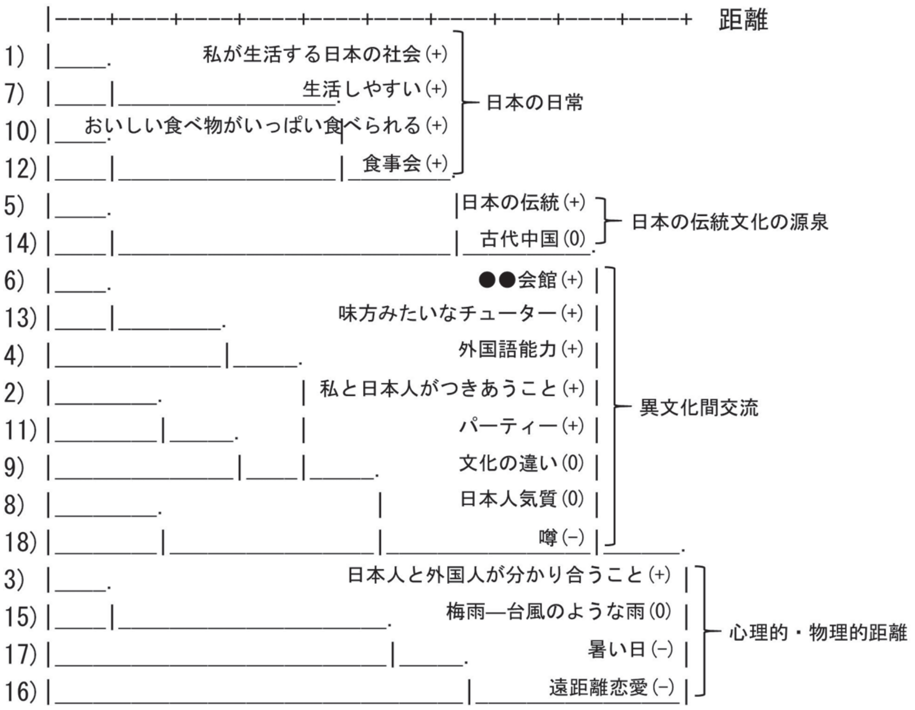

図 2　対象 B のデンドログラム

表２　対象Ｂの異文化イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体

クラスター番号 解釈	異文化観イメージ （順位、項目、評価）	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 日本の日常	1．私が生活する日本の社会（+）	経験したから
	7．生活しやすい（+）	経験したから
	10. おいしい食べ物がいっぱい食べられる（+）	経験したから
	12. 食事会（+）	経験したから
2 日本の伝統文化の源泉	5．日本の伝統（+）	アメリカでのイメージ
	14. 古代中国（0）	インターネット
3 異文化間交流	6．●●会館（+）	経験したから
	13. 味方みたいなチューター（+）	経験したから
	4．外国語能力（+）	経験したから
	2．私と日本人がつきあうこと（+）	経験したから
	11. パーティー（+）	経験したから
	9．文化の違い（0）	経験したから
	8．日本人気質（0）	経験したから
	18. 噂（-）	経験したから
4 心理的・物理的距離	3．日本人と外国人が分かり合うこと（+）	経験したから
	15. 梅雨ー台風のような雨（0）	アニメを見て／経験したから
	17. 暑い日（-）	経験したから
	16. 遠距離恋愛（-）	友達を見て

ビュー結果からクラスター２を「日本の伝統文化の源泉」と解釈した。

日本の伝統的な大切なものの、そういうものの多くが中国とか韓国から伝わりましたので。例えば七夕とかおはしとか、お米とか。全部、昔の中国とか韓国のことに関係ありますので。（来日前後の変化）全部が日本のものだと思いました。でも日本に来ると、他の外国人と話すと本当のことを知るようになりました。

以下のスクリプトは同様にクラスター３についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター３を「異文化間交流」と解釈した。

●●会館の生活とか、それに関するものなんです。みんながよく集まって、毎日のように遊んだりしますから。そんなイメージですね。●●会館では、ほとんどみんなが日本語を使いますけど。使えない人もいますから、日本人も外国語能力も必要があります。文化の違いは、みんなが一緒に同じ場所に住んでいますけど、文化の違うことが際立つ。文化の違いも大切だし、日本人の気質。例えば食事会のときには、一番、それは何ていうんだっけ。残りものを食べないこと、遠慮の塊。あと、うわさとかは結構、ありますよね。●●会館には。いろんな出来事がありましたので。

以下のスクリプトは同様にクラスター４についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター４を「心理的・物理的距離」と解釈した。

下の三つの部分は地理に関係あるけど、1番の日本人と外国人が分かり合うことは関係ないのかなと。15、17、16は自分の国で梅雨とかはないですから、それは日本とか他の、アジアの国だけのもので。暑い日もアジアで、アメリカよりたくさんありますから。それで関係あるかな。あとは、遠距離恋愛。もし、日本人と離れたら、他の国に帰国したら、その人がそういうことになりますよね。で、それは地理に関係あるんですけど。それ以上の関係はどうかなと思っています。遠距離恋愛は自分と関係ないことで他の留学生は見て感じたことです。（来日前後の変化）こんなに雨がずっと降るとは思わなかったんです。あと思ったより暑い。

3.3. 対象 C

図3は、対象Cのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Cは15個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、3、12、11、13の6項目であった。クラスター2は連想項目順位5の1項目であった。クラスター3は連想項目順位6、7、9、8、10の5項目であった。クラスター4は連想項目順位4、14、15の3項目であった。表3は、対象Cのクラスター番号と解釈、異文化観イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体の一覧である。

以下のスクリプトは図3を対象Cに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果から、クラスター1を「日本の大学生活」と解釈した。

日本の生活するクラスターとか、学生の社会とか。そんなクラスターと思います。･･･学校で忙しいけど、家に帰っていつもいろんなゲームしたり、レストランに行ったり、いつも元気と思います。バイトとか。勉強も忙しいけど、就職活動と一緒に。多分、暇なとき、あまりありませんから。●●人とちょっと違うところとは真面目。（来日前後の変化）忙しいイメージが

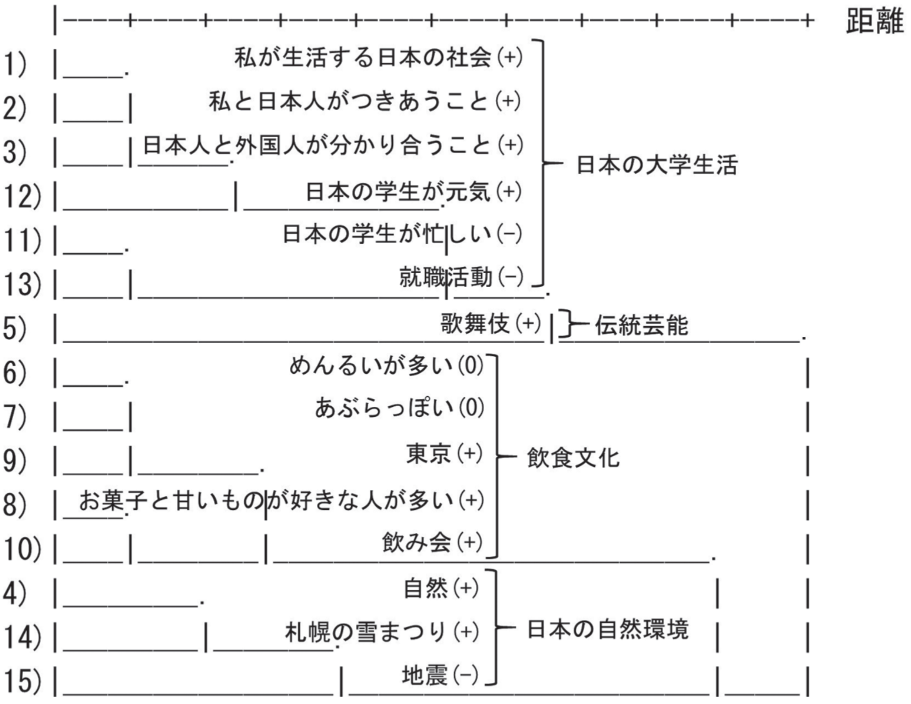

図3　対象Cのデンドログラム

あったんだけど･･･。多分、外国人と日本人の分かり合うことは、思ったより多いと思います。考え方は、あまり違いませんので、びっくりしました。私は日本に来た前に、日本人の考え方と、外国人の考え方は、もっと違うと思ってました。実際、来てみたら、そうでもないと思います。

以下のスクリプトは同様にクラスター 2 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター 2 を「伝統芸能」と解釈した。

伝統的の芸能のこと･･･。歌舞伎はこの間鑑賞しました。歌舞伎も含めて、日本の伝統的な文化は●●とか●●の伝統的なもの全然違うから、面白かったと思います。（来日前後の変化）日本の外で、そんな伝統的なものは本当に日本らしいけど、日本に住んでいるとあまりそんな伝統的なことは見る機会がありません。

以下のスクリプトは同様にクラスター 3 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター 3 を「飲食文化」と解釈した。

飲み会とか甘いものが好きな人多いのを見てびっくりしました。日本来た前に、そんな甘いものが多くて、飲み会をよくして。そんなイメージがありませんでした。でも、私は日本料理、知っていましたから。麺類が多いとか、あまりびっくりしませんでした。東京に行ったときいつも、飲みに行って食べ物を食べて、お菓子を食べたから。それは東京が印象が残っていいます。（来日前後の変化）飲み会とかこういうのは、来てから分かったことなんです。楽しい思

表 3　対象 C の異文化イメージとイメージ形成のきっかけ・媒体

クラスター番号 解釈	異文化観イメージ （順位、項目、評価）	イメージ形成のきっかけ・媒体
1 日本の大学生活	1．私が生活する日本の社会（+）	無回答
	2．私と日本人がつきあうこと（+）	無回答
	3．日本人と外国人が分かり合うこと（+）	無回答
	12. 日本の学生が元気（+）	●●生を見て
	11. 日本の学生が忙しい（-）	●●生を見て
	13. 就職活動（-）	友達を見て
2 伝統芸能	5．歌舞伎（+）	●●で歌舞伎を見たから
3 飲食文化	6．めんるいが多い（0）	レストランのメニュを見て
	7．あぶらっぽい（0）	レストランでよく食べるから
	9．東京（+）	賑やかな東京に行ってみて
	8．お菓子と甘いものが好きな人が多い（+）	友達と一緒に食べたから／コンビニに甘いものが一杯あるから
	10. 飲み会（+）	友達と飲み会をしたから
4 日本の自然環境	4．自然（+）	花見の経験から
	14. 札幌の雪まつり（+）	旅行で日本の自然を見て
	15. 地震（-）	日本で初めて地震を体験したから

い出です。

以下のスクリプトは同様にクラスター 4 についてインタビューを行った結果である。インタビュー結果からクラスター 4 を「日本の自然環境」と解釈した。

自然についてのことだと思います。お花は季節によって違うから、みんなお花見をすることが好きだから、そんな自然な楽なことは面白かったと思いました。（来日前後の変化）そんなに季節の行事が多いことは分かりませんでした。いつも花見をするとか、紅葉の楽しむとかも知らなかった。

4. 考察

(1) 留学生が日本社会をどのように見つめているか

図 1 および表 1 に示したように、対象 A は「① 私が生活する日本社会」と「② 私と日本人が付き合うこと」をひとつのクラスターとした。対象 A は、日本人がアメリカとアメリカ人をどう見ているかという視点から日本社会へアプローチしようとしていると考えられる。

日本人と話すときに、いつもアメリカ人だから、こういうふうに考えるだろうと確認する（対象 A）。

従来の対日観の研究では、留学生が日本に対するイメージをどのように構造化しているか明らかにしてきた（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011）。本研究において連想刺激をあらかじめ指定した結果、「日本人のアメリカ観が留学生（対象 A）の日本社会観の中心を形成」するという、これまでに確認できなかった視点が観察されたと考えられる。連想刺激の操作的手続き（内藤 1997）によって得られた新たな知見であると考えられる。

対象 B と C は日常の具体的経験や学校生活が日本社会観の軸を形成していると考えられた。先行研究における対日観（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011）や対日観の変化（内藤 2014、安 2015、安 2016）においても類似の結果が示されている。

自分の●●会館の生活している経験かな。友達とか、助けてくれる人がたくさんいますので（対象 B）。日本の生活するクラスターとか、学生の社会とか。そんなクラスターと思います（対象 C）。

これらは留学生にとって共通点の多い事柄であると考えられる。PAC 分析結果は自身の問題について気づきをもたらすことが可能である（内藤 1997）。留学生と支援者の情報共有ツールとして応用が可能であると考えられる。

(2) 日本人とどのように付き合おうとしているか

対象 A は、一個人として日本人と付き合う際も、付き合う対象である日本人に客観的にアプローチしようとする構造がみられた。「① 私が生活する日本社会」と「② 私と日本人が付き合うこと」の 2 つの連想刺激が「日本人のアメリカ観」と解釈したクラスター（図 1、表 1）において共存していることからも、対象 A は他者の視点を意識していると考えられる。

時々アメリカ人のように答えたら、ちょっとステレオタイプになっちゃうから、いつも日本人のように答える（対象 A）。

対象 B は、日常の具体的な交流経験から日本との付き合いを試みていることが示された（図 2、表 2）。対象 C は日本人の日常行動の観察を通して個人的なつながりを模索していることが示された（図 3、表 3）。

自分の●●会館の生活している経験かな。友達とか、助けてくれる人がたくさんいますので（対象 B）。家に帰っていつもいろんなゲームしたり、レストランに行ったり、いつも元気と思います。外国人と日本人の分かり合うことは、思ったより多いと思います（対象 C）。

身近な人間との交流が対象 B の日本社会における共生に影響を与える可能性が示された。PAC 分析は自己理解促進機能を有することが示されている（井上 1998）。結果を留学生と支援者が共有することを通して、留学生が日本に住む人々と共生していく一助となると考えられる。

⑶ 集団としての自国人と日本人が付き合うことについてどのように考えているか

対象 A は伝統文化という抽象的な概念を通して集団間の付き合いを理解しようとしていることが示された（クラスター 2「伝統文化の尊重」図 1、表 1）。

日本の祭りや伝統を外国人が理解すれば、より深く日本人と分かり合える（対象 A）。

対日観の先行研究においても伝統文化のクラスター形成が示されている（安 2013、安 2014）。伝統文化一般のイメージに加え、対象 A では伝統文化を媒介として自国人と日本人の集団間の付き合いを把握しようとしている点が先行研究ではみられなかった点である。連想刺激を指定した上での PAC 分析の効果であると考えられる。

対象 B と C は具体的な主観的経験を集団間の付き合いに一般化しようとしていることが示された。各対象の結果から、個別の態度構造を質的に探ることを通して 1 年程度の短期滞在の留学生であっても滞在中の日本社会における共生を支援するための有力な資料となりうると考えられる。

⑷ その他の特徴

あらかじめ対象に指定した 3 つの連想刺激を含まないクラスターも観察された。対象 A は「現代の日本（クラスター 3; 図 1、表 1）」、対象 B は「日本の伝統文化の源泉（クラスター 2; 図 2、表 2）」、対象 C は「伝統芸能（クラスター 2; 図 3、表 3）」「飲食文化（クラスター 3; 図 3、表 3）」「日本の自然環境（クラスター 4; 図 3、表 3）」であった。対象 B「日本の伝統文化の源泉（クラスター 2; 図 2、表 2）」を除き、先行研究における日本観と類似した結果がみられた（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011、安・池田 2012、安 2012）。留学生が共通して有する視点である可能性が高いと考えられる。

これは全部、現在的な日本文化かな（対象 A）。日本の伝統的な文化は●●とか●●の伝統的なもの全然違うから、面白かったと思います（対象 C）。飲み会とかこういうのは、来てから分かったことなんです。楽しい思い出です（対象 C）。自然についてのことだと思います（対象 C）。

一方、対象 B で「日本の伝統文化の源泉（クラスター 2; 図 2、表 2）」と解釈したクラスターが形成された。日本文化の源泉が東アジアに遡れることを他国出身留学生から学ぶなど、対象者が来日前には予期していなかった異文化理解の形成がみられた。

全部、昔の中国とか韓国のことに関係ありますので。（来日前後の変化）全部が日本のものだと思いました。でも日本に来ると、他の外国人と話すと本当のことを知るようになりました（対象 B）。

留学生の日本社会における共生は、日本人との共生だけを意味するものではない。このような個別の質的な態度構造の正しい活用を通し、留学生のより充実した日本社会における共生を支援していくことができると考えられる。

5. 結論

本研究では、日本人と外国人が共に暮らす日本社会における留学生の異文化共生に対する理解の構造を質的に明らかとすることを目的とした。PAC 分析を用いた検討の結果、以下の点が明らかになった。

(1) 留学生が日本社会をどのようにみているか

主観的アプローチだけでなく客観的アプローチによる日本社会観を形成する留学生も存在することが示された。

(2) 日本人とどのように付き合おうとしているか

一個人としての付き合いの際のストラテジーは個人的態度がより反映されることが示された。

(3) 集団としての自国人と日本人が付き合うことについてどのように考えているか

抽象的な概念を通して集団間の付き合いを把握する対象 A は、伝統文化という抽象的な概念を通して集団間の付き合いを理解しようとしていることが明らかになった。対象 B と C は具体的・主観的経験を通して集団間の付き合いを一般化しようとしていることが示された。

(4) その他の特徴

日本文化の源泉が東アジアに遡れることを他国出身留学生から学ぶなど、対象者が来日前には予期していなかった異文化理解の形成がみられた。

短期日本滞在者の一例である交換留学生も日本社会において共生していく方法を模索していることが示唆された。留学生と支援者が PAC 分析結果を共有することによって、留学生の異文化理解と日本社会における共生の質を高めていけると考えられる。

対象 A の結果に見られたように、連想刺激を指定することにより、従来知りえなかった、留学生の客観的視点が明らかになった。日本社会における共生をより良いものにするための、留学生と支援者双方にとっての手がかりを得ることができた。

付記

本論文は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号 : 17K02838，研究代表者 : 安龍洙）の助成によるものである。

注

1）会館は学生寮を指す。正式名称は本文中に示した●●会館（伏字部分は固有名詞のため匿名化）。会館は、留学生間で使用されるその通称。

参考文献

安龍洙（2009）「外国人の対日観に関する研究－韓国人短期留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』7, 1-13.
安龍洙（2010a）「外国人の対日観に関する研究－中国人短期留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.
安龍洙（2010b）「外国人の対日観に関する研究：日本滞在歴の長い韓国人の場合」『ユーラシア研究』7(4)，373-392.
安龍洙（2011）「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』9, 1-18.
安龍洙・池田庸子（2012）「日本人の外国・外国人観に関する研究－茨城県在住の主婦の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』10, 15-28.
安龍洙（2012）「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』10, 1-14.
安龍洙（2015）「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』13, 1-14.
安龍洙（2016）「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』15, 93-105.
井上孝代（1998）「カウンセリングにおける PAC（個人的態度構造）分析の効果」『心理学研究』69(4)，295-303.
川那部和恵（2006）「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『教育実践総合センター研究紀要』15, 53-60.
内藤哲雄（1997）「PAC 分析の適用範囲と実施法」『人文科学論集』31, 51-88.
内藤哲雄（2014）「海外長期滞在と日本イメージの変化：日本語教師のケース 1」『日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集』204.